

遺伝子治療に再び脚光

体内に遺伝子を送り込んで病気を治す「遺伝子治療」が最近、改めて注目されている。過去には、白血病などの重い副作用が発生し、研究が足踏みした時期があるが、遺伝子を運ぶウイルスの改良が進み、安全性が向上した。日本でも、免疫不全症やパーキンソン病などの患者を対象に、治療効果を確かめる臨床研究が進む。（木村達矢）

「体がリセットしたような感じ。（体内の細菌をたたく）抗生物質の効きも良くなった」。こう話すのは、昨年7月、都内の国立成育医療研究センターで遺伝子治療を受けた鹿児島県鹿屋市の永吉貴祐さん（28）だ。永吉さんは、免疫力が弱くなる「慢性肉芽腫症」と

いう遺伝病を患う。免疫に関わる遺伝子に問題があり、白血球が病原体を攻撃する際に必要な活性酸素を作れず、乳幼児期から重い感染症を繰り返してきた。

小野寺雅史・同センター成育遺伝研究部長らは、永吉さんから様々な血液細胞に変化する能力のある「造血幹細胞」を採取。ウイルスを運び屋として使い、治療の遺伝子を造血幹細胞の核に組み込んだ。

永吉さんの体内に造血幹細胞を戻すと、正常に働く白血球に変化し、免疫力は大きく改善した。この病気に対する遺伝子治療は、永吉さんが国内で初めて。小